

多田 こんにちは、多田です。

会場 こんにちは。

多田 ここへ座って話すの二回目なんですけど、後ろに弘法大師さん、空海さんおられまして、何となくお尻がむずむずしながらいつも話すんですけど、座らせて話をさせていただきます。私は歴史的建造物を直したりする専門家でも歴史家でもありませんので、少し新しいものを作る人間がこういう歴史的なものをさわったときにどういうふうを感じるのかっていうことと、これからどういふふうにそれを維持していくべきかっていうようなことを話してみたいと思います。三つほど話をしてみたいと思うんですけど、一つは旧陸軍第11師団が善通寺に来たことで街が一変しております。いいように変わったと思います。そういうこと、その影響を話したいと。それと善通寺のお寺、総本山善通寺が自ら有形なもの無形なものを生かすために、いろんな努力をされています。そういう話をしてみたいと思います。それと今から日本というか地域の文化を生かすために、もうちょっと考えてみたらどうかなっていうようなことも話をできたらと思いますんで、よろしく願いいたします。善通寺は当然総本山善通寺っていうものが基軸にありまして、そこに11師団が入ってきた。それで街の近代的な様相は作れていったと思いますので、今日はお寺だけじゃなくて、そういう近辺の話もしてみたいと思います。先ほども話したとおり、私は善通寺の中ですごいと思うことが4点ほどあります。これは次の世代に確実に伝えられるものだろうと思うんですけど、一つは風土からの遺産っていうのがあると思います。この我拝師山という名前もすごいですけど、形態も本当にすごいというふうに感じております。これは、オセヤマ(?)のほうから撮ったものなんですけど、見ると奈良の風景って言われる人が多いです。二つ目が古墳群です。この時代から善通寺は住みやすかったっていうことが一つの大きな要因だろうと思いますし、そのものが善通寺の市街地から非常に近いところにあるっていうのも大きな利点のように思われます。これは空から撮らせていただいた写真なんですけど、善通寺の駅を中心にしまして、南側にお寺がありまして、北側に旧陸軍が入ってきたという、非常に面白いスタイルを出していると思います。その中で、この少し見にくく(?)なってる部分が旧陸軍が軸におったところです。今から少し私がこういうものを作ってますよというのをお見せしてから、歴史的なものに入ろうと思います。これは同窓生、卒業生の居場所を確保するために作った県立高校の同窓会館です。これ木造の空間なんですけど、大空間の中で子どもたちの夢を育てようということ、その木の武道館、木造で作った木の武道館。これは善通寺市内にあるんですけど、街のお医者さんで、町医者っていったいどういうことが本来の仕事なのか。かかりつけ医師になることもひっくるめて、街にいろんなものをプレゼントしようっていうことで作りました。これタクマ(?)なんですけど、漁村に建てる公民館っていうのは、漁師の人たち朝早いですから、館が閉まっても使えるようなものにしようっていうことで作りました。これは温泉施設があった横に公園施設を作ろうっていうことで、3世代の人たちが学び合えるような体験型の公園を作ろうとしました。***の街なんですけど、暮らしてる人に優しい街を作ろう。訪れる人にちょっと意地悪でもいいやないかっていうことで作った街、道、まちづくりの、人作りの一環です。これは四国学院なんですけど、

大学にとって図書館っていうのは顔になりますから、どういう表情を持って、どう動かすか。市民開放するというのも大切なことで、市民がどんどん来てもらいたいですけど、学生が勉強できなくなったら困るので、階ごとに機能的なものを分けて作りました。これ普通寺の宝物になってくるとは思いますけど、旧陸軍の非常に大事な、普通寺が軍都であったっていうことを伝える重要な施設だと思います。守りたい建物、施設っていうのが普通寺には大きく四つほどあると思うんですけど、これは質量ともに日本で唯一普通寺に残ってるということをぜひ記憶に残しておいていただけたらと思います。これ、保存なんですけど、小学校です。耐震改修をするときに、今からまた40年50年使うことを考えて機能回復も一緒にしてしまおうということで、ただ単に安全だけじゃなくて心地よさを与えた建物です。これもつるぎ町っていう庁舎なんですけど、手狭になって直そうっていうこともあるんですけど、本庁舎としての機能を整理をしまして、より動きやすいっていうことを前提にして、これも耐震補強と機能回復、庁舎としての本来の重要な項目をピックアップしたものです。庁舎っていうのは、街にとってでもシンボルであるべきだろうということで、このシンボル性を明かりにも合わせて作り上げていきます。これ、本山寺のお寺の五重塔を今、修復してるんですけど、これは確実に次の100年へ思いと歴史と文化を守り伝え、どういうふうに伝えていくかっていうこと、守っていくかっていうことを考えた保存修理のものです。多くの先生方の力を借りながら、本当に公的資金ゼロでやってるっていう非常に日本でも珍しいやり方で進んでおります。前回、話した清水先生も中に入って、知恵を出していただきました。これも普通寺の航空写真ですけど、これ昭和になってからなんですけど、この部分に、オレンジに書いてる部分の左上のところが普通寺の。今、印が、私が生まれ育ったところで玄関を開けて五重塔が見えてるっていうところで育ちましたので、そういう意味でも寺院とのつながりっていうのありましたし、当然陸上自衛隊が、昭和、僕1950年生まれですからちょうど普通寺に来られたときの、共存して生きてたっていう。写真じゃ見にくいんで、地図に変えますけど、このグレーの色を塗ったところが旧陸軍施設っていうところ。その中に先ほど四つほどっていう話したのは師団司令部、以下四つの建物。これが移築もせずに残ってるっていうのは普通寺だけっていう。当然日本の中で一つっていうことは世界の中の一つですんで、それを大事にするべきだろうと思います。普通寺にとっては。なぜ城下町でもない普通寺に、県庁所在地もない普通寺に師団来たのか。当時師団を置くっていうのは、非常に重要事項だったと思います。交通の便がいいとか水がいいとかいろんなことがあったと思うんですけど、その場所的に郊外に行かなかったということ、城下町みたいなのにぼんとお城の大名の屋敷を壊して置くんじゃないっていう。新しい田畑のところに存在させたっていうのも一つの大きな要因なような気がします。写真はこれは1950年頃の写真なんですけど、今、印ができたところは、借行社があったところです。駅からすぐのところ借行社があって、奥側に進んでいくごとに、軍の本当の施設が、中心施設ですね。兵舎があったり、兵器庫があったり、師団司令部があったり、そういう流れに。その周辺に当然軍が来ますから、建物的にも、機能的にも、街がその軍隊の人たちを支えなきゃならないので、そういう施設が存在をしています。これはちょっと見にくいんで年代順に、いろんな軍が来たおかげで普通寺市内も変わっていきましてよ、お寺も変わりましたよっていうことを列記し

たものなんですけど、大まかに話をしますと、金堂は江戸時代のものなんですけど、五重塔は江戸から工事をしてたんですけど、実は明治になってから完成をしています。明治 35 年に完成をします。南大門も再建なんですけど、明治 41 年に完成しております。この辺が旧陸軍が設置するのを決めたのが 29 年で、兵舎を先に 30 年に建てて、31 年に師団司令部を建ててます。このときに相当な技術と大工さんと資本とが入って街が一変していくんですけど、その中で総本山善通寺というものと旧陸軍というものが少しいかたちで僕は絡み合ったような気がします。その一つはせっかく多くの人に来てくれるんだから、お参りもしたかっただろうと思います。そういうことを併せ持ったのではなかろうかと思ってます。それで周辺にはそれに耐え得る必要なものができていったと。なぜ旧陸軍が入ってきたときに、総本山善通寺が建物に少し気を使ったのでないかなということ。この辺は歴史家でないので、平気な顔してしゃべるんですけど、実は南大門非常に大きいです。堂々たる形をしてるんですけど、実は高さが 5.3 メーターを超してあるんです。普通から言うたらこんな高さ要らないんですけど、僕は、これ、いい意味で解釈してるんですけど、騎馬のウマに乗って、旧陸軍の方がお参りをしようと。これは当然その時代は許された行為なんです。そのときに頭にこんなものがついて、それを考えると、恐らく 1500 のウマの高さの上に 800 の座高の人が乗って、上に帽子をかぶると 3 メーター近くのボリューム、高さを持つわけですね。そうすると南大門というものがそれを受け入れるとしたら、僕はこういうかたちになった。それはいい意味で非常に評価すべき共生の共存のスタイルでないかなと思ってる。先に兵舎が建ちました。これは四国学院の中で登録文化財として大切に保存をし、使っていただいております。耐震補強についてでも、いいかたちで直せないかっていうこと、相談を受けたりしてるんで、できる限り力を貸していきたいというふうに思ってます。それとこれが私たち建築関係者だけでなく、一般の方々も相当、乃木館というものに生まれ変わってますので、見に行かれていますけど、これは文化庁がいいからうんぬんと言うても何の価値もないと思いますけど、文化庁がいいって言うことは基本的に日本の文化の財産ですよっていうことを言ってるんだろうと思う。本当は一番残したいのは、この建物をいいかたちで次の時代に受け渡すことだろうと思います。内部はこういうふうになってまして、乃木さんが当時菊の御紋はちょっと仰々しいんでということで菊を横から見たような模様を天井につけたり、当時六つほど同時に師団ができたんですけど、そのときに全く同じものが作ってるっていうのが何カ所か、特に金沢なんかも。それでもほとんど形態的にも壊されたり移築されたりしてしまってます。その師団司令部のほうもこれも登らせていただいて、40 年近く前なんですけど、中には棟札も残ってますし、貴重な資料もたくさんあります。こういうものも文化的な。昔の人はそういうものを残し伝えるっていうことに対する思いっていうのは大きかったと思ってます。これ、偕行社です。これは運よく、運よくって言ったら怒られますけど、建築学会の力を入れて、実測調査をして、重要文化財にしてから直しましたんで、お金の 2 分の 1 は国から出ました。横の付属棟も国からお金をいただいて直しました。それで今、自由に使えるように進めております。これ正面玄関なんですけど、その横に付属棟というものをつけました。通常は重要文化財と付属棟は一体にはできないんですけど、香川県との話しの中で建築指導室のほうも理解をさせていただいて、つなぐことができました。これも

恐らく、俗に言ういいかたちでは日本で初めてだろうと思います。もともとは、この配置図の上のほうにあった付属棟があるんですけど、付属棟あたりはいくつかの写真があったりするんですけど、なかなか本体の建物っていうのはないんですけど、現実はこの広間を含めた部分だけが残っておりまして、ここにこれを生かすためにはどうしてもトイレがあったり、事務所があったり倉庫が要ったりしますので、付属棟を造ろうということになったんですけど、付属棟は結果的に東側に造りました。最終的に大きな間違いをしてるの、重々承知のうえで東側に造りました。相当話をしたんですけど、結果的にはなぜだめだっという話をしたか。東側に貴賓室がありまして当時の摂政官がここで泊まったり執務をされた。東側に付属棟を作ると、ここを通過して大広間に入らなきゃならない。これは本来間違ってるでしょうということ、できるもんなら、農振センターを壊して、西側に作るべきだをお願いしたんですけど、そのときは壊れなかったんですけど、今、もうなくなってしまいました。庁舎を建てるのが優先だっ、それも正しいのかもしれませんが。ちょっと疑問を持っております。ゆえに、こういうふうには東側に付属棟ができて西側に建物が存在してたんで、付属棟は作れませんでしたという。先ほど貴賓室の前っていうのは、こういう貴賓室なんですけど、これも完全に復元して、ここだけじゅうたんを敷いてるっていう。当然だろうと思います。これ大正時代に、摂政官、来られるときに、直したんだろうと思います。貴賓室の扉を開けるとこういう大広間につながっていきますので、本来本当に位置的なものからいくと、この配置っていうのは、非常に僕は大事にしなきゃならないもんだろろうと思ってます。今は何にでも使えますんで、宴会をしたり、祝賀会をしたり、結婚や披露宴をしたり音楽会をしたりということが続けております。これ音楽会です。ジャズのコンサートをしたとき。結構残響音があるんで、音楽はいいんですけど、少し乖離(?)をするときには音が残って大変なのがあります。南側のここも総合会館が建ったんですけど、南側の庭園はきちんと残していただいてましたんで、それを利活用しようということ。住民から意見が出てた一つの中に重要文化財を見ながらお茶でも飲みたいねっていう、その中に入ってるだけじゃなくていい建物眺めたいねっていう話もありましたので、そういう意味でも付属棟っていうのは価値があったと。南側の庭園っていうのも、これ建物の地盤から1メートル200ほど高いところに建ってますんで、本来少し高すぎるぐらい高いんです。でも、それは逆に言えば縁側という、ここ、ドバイ(?)っていうんですけど、縁側に立って、そこから演奏したときに芝生のところが観客席にもなるとか、いろんな使い方ができる。非常にいい空間だろうと思います。もともとは訓練のときに軍の方々に話をするときに、だ一と並んでるところの完全な演台だったと思います。これが明治から大正にかけて作られた兵器庫の兵舎、レンガの兵器庫なんですけど、不思議な光景だと。これも現役で残っていて、表のテッキ(?)も、一時壊されて撤去してきたんですけど、当時のコンセイ(?)団長と話したら復元しようということで、お金大変でしょうって言ったら、自衛隊の中の溶接の訓練で作るって言って、直しましたけど、すごい発想だなと思います。そういうことをすると、文化財って守りやすいんだろうなというふうに感じてます。それと何度も皆さんに話をしてるレンガの兵器庫の向こうに五重塔が見えてるっていうこの姿を僕は世界中の人に見てもらいたいと思うんです。平和とかうんぬんとかの話にはこういうことすると早いんじゃないかというふう

に感じます。兵器庫の中も、これも地域性が出てまして、中が全部石張りになってます、金沢等にあるのは、同じ建物なんですけど石が少なくて、車を通すとこだけ石で張ってるとかそういうことになってるんです。香川県は瀬戸内海からたくさんの石が出たんだろうと思う。それも一つのこの地方性だろうと思うので、同じレンガの兵器庫も各地によって、そういうものが変わってるっていうのは大きなテーマだろうと思います。それと旧陸軍が来て、いろんな工事をしたおかげで、建築カンモン(?)とか工法が非常に普及されたと思います、一般建築の中に。善通寺の五重塔とか、いろんな***建物も見せていただいたり、直したりしてるんですけど、本山寺の五重塔もそういうところが非常に顕著に現れております。善通寺の中に、軍が来たおかげで、いろんな街が変わっていきましてよということで、駅は当初から、あった。できたのは明治の頃から、明治22年頃に駅ができてきたんですけど、それを駅があつて、先ほど話した偕行社がすぐあつてっていうのは非常に珍しいケースで、そのおかげで駅に送りに行ったり迎えに歓迎をするとかそういうふうなセレモニーができやすい街なんです。これも当初、偕行社を重要文化財に推挙してもらうときに、文化庁といろいろ話してたんですけど、多田さん、偕行社って場所変わってないか、移築されてないかっていうこと、いや、されてませんという話をしたら、非常に珍しいと。駅があつて偕行社があつて重要施設があるっていうの珍しい。そのぐらい善通寺の街に溶け込んでたんじゃないかというそういうのも大きな評価になってきました。今でもこの駅の登録文化財にして残ってるんですけど、実はこの当時、JRの建物で現役のものが登録文化財に、重要文化財もちろんなんですけど、登録文化財にもなってなかったっていうことで、どうしてもその現役の施設を登録文化財にしようっていうことで話をしました。今はもう東京駅も重要文化財になって直っておりますけど、逆に言えば善通寺からJRは文化財の見方が変わったって言っても大げさなことではない。そういうふうなものが発信できるっていうのは、僕は非常に大きな力だというふうに思ってます。これ、全部今の現役の駅なんですけど、面白いのは、柱に鉄のレールを使ったり、風を止めるためにアクリルの板を張ってるんですけど、左下に出た写真は先日撮った写真で、本当に汚さないで使ってるっていう。建て直さないっていうことは非常に大事だと思うんですけど、直すときに、文化的価値を損なわないで直すっていうのは非常に難しい部分があると思うんで、それを本当にできるかどうかっていうのもこれからの課題のような気がします。偕行社を重要文化財にするときに、いくつかの建物を登録してほしいということもありましたんで、周辺を登録文化財、そのときに旧陸軍が来たときに当然酒屋というものが必要になってきますんで、酒屋さんができます。それも造り酒屋です。ここのお酒が師団一とかいう名前がついたお酒もあるんで、技術的にも酒屋さんは、ある意味で言ったら伝統的な日本の工法を持って作られた建物だろうと。それともう一つ絶対的に要るのは酒屋さんと写真館が要ります。それが一つ残っているのが、水尾の写真館です。徳島の今でも有名な立木さんの写真館も善通寺に来てたらしいんです。元の出が徳島ですから。水尾写真館は今でも頑張っていて、基本的には3代目になるとは思いますけど、建物を大事に使っていただいています。修理のときには、どう修理しようかって言って聞いてもいただけるんで、ある意味でいったらお金大変だと思うんですけど、こういうものを維持管理するっていうのは。それでも個人で頑張ってくれてるっていうことに対して、市民と

しても何らかのお手伝いはすべきだろうと思ってます。あともう一つ、善通寺に誇れるものっていうのは、これは乃木神社ですから、賛否もあるんかもしれませんが、非常に質の高い、鳥居さん一つも僕は質が高いと思うんです。鳥居を登録文化財にするって非常に珍しいですけど、これを登録文化財、現実にしております。なってます。それともう一つ、この建物が非常に洋風な建物の雰囲気皆さん、見て感じられると思いますけど、昭和12年にできたんですけど、昭和9年に東京の乃木神社に、これは大江新太郎さんという非常に著名な建築家が作った設計したものがあるんですけど、それと同じものを作ってるんです。少し小ぶりにはなってるんですけど、デザインが全く同じで、日本の伝統的なスタイルじゃなくて、少し洋風なものを組み込んで、それで乃木神社を作ってる。乃木さんうんぬんのことはあるかもしれませんが、当時の陸軍、軍隊、海軍もひっくるめて、洋風と日本の伝統的なものと組み合わせた努力っていうの、こういうところでも表に出してるっていうのも評価されるんだろうと思います。本殿も少しかたちが通常の和風のものとは変わってます。でも機能的には全く使い勝手がおかしくなるようなことはしておりません。ところが残念なことに、本殿ではないんですけど、社務所が建築的には非常に洋風なかたちを取り入れた建物でしたので、価値が非常に高かったんですけど、焼失してしまいました。再建をすることは難しいかもしれんけど、今、実測調査をしたら、再建も可能だろうということで実測調査をしましたが、なかなかこういうもの、日本の誇りやとか、地域の誇りやとか、善通寺の誇りやって言って再建までは難しいかもしれませんが、そういう評価をもう一度考えてみる必要があるような気はしてます。住宅も洋風のものでできだしまして、これはイソノさんというお宅ですけど、恐らくこういうふうな建物がもう維持管理できなくなって、きっと壊れていこうと思うんです。壊れていくというか、個人の力で維持管理をしていくことは、もう不可能だろうと思います。それを街としてどういうふうにかつていうものは一つ議論をすべきだろうと思う。少なくとも善通寺に旧陸軍が来たから、旧陸軍の関連施設をきちんと残して、それにかかわる写真館やら酒屋さんぐらいは残しておくことのほうが地域の発信というか、誇りになるんじゃないかというふうには感じてます。これも現存してる酒屋さんなんです。この大川酒屋さんは持ち主の方が大学の先生やったりしたこともありまして、きちんと直してくれました。それで今も、基本的に大阪に住んでみたいんです。帰ってきたときには、きちんとここに住まわれて、相当なお金をかけて維持管理をしてくれています。こういうものを、ぜひ、生かしていくべきだろうというふうに思います。そんな軍隊が来て、変わっていった街なんですけど、その中で確実に自分たちの文化的なものを守り続けたのが、善通寺だろうと。これも国立図書館のほうからいただいた図面なんですけど、江戸のときから、トウダイ(?)のここにある、誕生院のこと、伽藍の東院のほうとがあったわけですけど、その中でもいくつか焼けたり、傷んだり、なくなったりして変わってはいってるんですけど、その変わり方が時代によって非常に面白いな。前回の清水先生が話したとおり、門を通過して、五重塔があって金堂なり本堂があったのが、そのうち五重塔、横に置くような時代になってきたっていうのが、歴史家の方もお話をされるんですけど、善通寺も、例をそのとおり、もともとは金堂の前に五重塔跡っていうのが文書的には存在しますんで、残ってたと思うんですけど、いくつかのナンダイカン(?)が建て替える時期に少

し正面からずれて建てられたんだらうと思う。その代わりに南大門から真っ直ぐ金堂が見えるっていうのは、ある意味で言うたら、時代の要求だったのかもしれませんが、お参りがしやすいという状況。これはこういうものは先ほど配置計画が大事だって話をしましたが、これ、容易に動かしてるわけじゃなくて、日本中で同じようなことが起こってるっていうのは、そういうふうな情報交換をきちんとして、本当に塔はどこにあるべきなんだということを検討して作られたように思います。もう少し古い写真、図面の、絵図のほうにもそういうものが残ってますので、もともと五重塔、金堂の前にあったっていう。それを何回かののちに移設をしたっていうことは明確になってくると思いますけど。そういう文化的なものが建った善通寺。その中で先ほども話しました南大門が41年、五重塔が明治35年に仕上がってる。この辺のかかわりが少し洋風なものが入ったり、金物が入ってきたりということを容易に受け入れた技術交換をしていったんだらうと思います。横に書いてますが、師団が来たとき、司令部が建ったとき、偕行社ができたときっていうの、当然同じ時期に工事をするわけですから、知らん顔をしてよそを向いとるわけじゃないと思います。そういうことを感じてます。その後、昭和になって、戦争が終われば、相当栄えた軍都だったと思います。そのときに、誕生院のほうの建物もどんどん直していってます。昭和15年ぐらいまでに直りきったというふうに思います。弘法大師、空海さんが生まれたっていうのは本当にこの近所で生まれたんで、時代が変われば僕も近所でおった友達だったんだらうと思うんですけど、今、そんなこと言うと、怒られます。後ろからどつかれそうな気がします。でも、空海さんがいた佐伯家っていうのは本当にどこにあったんだらうっていうのは善通寺市でも非常に悩まれてて、どっか探したいねっていう話をしてたんですけど、運よく四国学院の図書館を設計することになりましたんで、市のササガワさんに相談したら、どうしても掘りたいっていうことで、それを調査をいたしました。埋蔵(?)の方ってすごいですね。的中するんです。非常に少し大きな住居が出てきまして、蔵的にも、美術的にも、出てくる金物とか生活用品もレベルが高いついていうことがわかりました。空海一族がこの辺で住んでたんだらうっていうふうなことを善通寺市は表明をしました。位置的にも非常にいい位置に存在をしてるような気がします。その善通寺の中で、正直な話、サカタさんという人は、善通寺の中で執行役員になられたときに、善通寺の五重塔以下、この寺院建築は建築的な評価がないんかっていうことを問いただきました。いや、非常に高い評価がありますよっていう話をしたんですけど、市の文化財にも県の文化財にも当然国にも指定もされてない。それは逆に今されてないのはいいかもしれんということで、この色を塗ったま赤の部分、27個を登録文化財にしてしまいました。群として、境内の中、すべて建物登録にしますっていうの、これも日本で初めてやったことなんで、初めはちゅうちょされたんですけど、これをやることによって史跡とか環境とか景観とか守れるっていうことで27個しました。その中で五重塔は江戸時代から工事して、明治には完成したんですけど、江戸時代で建てられた日本中の五重塔は全部重要文化財になってますんで、江戸から明治に建てた五重塔の評価はもう一度してほしいということで、国と調整をしました。その中でそれよりか古い金堂と一緒に重要文化財にしてください。その基本的には僕は総本山善通寺の取り組みが功を奏したと思うんですけど、これを、評価をサカタさんに言われて評価をするっていうときに、僕1人じゃ

できませんから、歴史家と構造家と東京のほうから皆来ていただいて何回か会議をしました。その中で、これはすごいねと。現地も大変やと思うんです、金堂にも足場を作って、コヤグラ(?)に上がった、御影堂のコヤグラ(?)の中にも上がらせてもらいました。そういう調査をして、その建物の価値を文書に箇条書きにしたっていうのが大きいと思います。追跡っていう四国新聞の当時の記事なんですけど、寺院建築をまとめて保存にするっていうのは非常に大きなくらみでして、その評価とこれが普通寺市内の建物、特に今日、来られてますんで、言いにくいんですけど、防衛庁が文化っていうものを本気で見直してくれないと普通寺の街では、本当に普通寺が生まれた、軍都として生まれた、都市計画ができたっていうことが消えてしまうということ、非常に危惧している。そういうことを文化庁の方々と一緒に話をした一つの表明の記事です。これが南大門、五重塔、金堂というところ、重要文化財になりましたんで。金堂は江戸時代の後期ですのもものもしっかりもしてますし、とにかく維持管理がしっかりされてます。重要文化財になりました。2塔(棟?)一緒になりました。金堂とこれも***もそうなんですけど、棟札っていうのがきちんと残ってるというのが、一番事実として伝えやすい項目なんで、こういうふうには重要文化財指定書というのをいただきます。これ、あまり見たことないと思います。裏はこういうふうになってまして、実は所有者が変わると、きちんと登記し直してくださいねっていうぐらい、とにかく誰が維持管理してるかっていうことを明確にしておこうと。それは僕は大事なことだろうと思う。こういう裏側があります。これ、五重塔、これは一塔一基(?)ということで二つまとめて重要文化財を受けましたので、そういうかけ方をさせていただいてる。これが五重塔関係の棟札です。これも当時普通寺もばらばらと持ってたんですけど、先生方に入ってらって調査をして全部文書も読んでもらって、その価値を打ち出したっていうことです。前回の清水さんも同じような話をされましたけど、普通寺の五重塔っていうのは非常に僕は形態的にも価値が高いと思ってるのは、高さもそうです。日本で今、残ってる文化財の中では3番目に高い建物。それと通減率っていうのがあるんですけど、法隆寺のほうが角度が、三角形が緩いんです。ところが普通寺になってきますと、大概垂直に建ちだすと、垂直に建てるっていうのは一般的に考えても難しい話ですから、そういうことを平然とやりきれたっていうのも大きな技術力だと。それが江戸からいろんなことがあって、明治の35年ぐらいまでかかったんですけど、その間に作る人たちは、技術屋さんのほうは一生懸命勉強し続けたんだらうというふうに思います。これも清水先生が同じようなやり方をやりましたけど、全部建物をびゅっと引き伸ばしまして、同じ高さにしてしまいますと、普通寺の建物と京都の護国寺、東寺の建物の形態、相輪の高さがほぼ同じ。これが多分古典的な方法だろうと思います。法隆寺からずつつないでくる。ところが、備中国分寺と今、僕らが直してる本山寺は相輪が少し短くなってるんです。その代わり、胴が長いんですね。胴が長いっていうのは、非常に倒れやすいっていうこともつながっていきますんで、まして本山寺は普通寺よりか6割ぐらい建物が小さいです。平面的に6割ぐらい小さいということは、構造断面は下手したら30%ぐらいになってしまう。そういうものでも作り上げられるっていう技術力ちゅうものに対する評価っていうのも、僕はすべきだろうと思うんですけど、本山寺を直してるときに相当普通寺を見に行きましたっていう記録が残ってんですけど、普通寺の五重塔を見

たと同時に、どうも偕行社あたりは結構自由に見れたと思うんです。師団司令部は軍施設ですから、なかなか一般の人が入れなかったと思うんですけど、師団司令部は俗に言うたら民間の施設ですから工事的にも見れたと思う。そういう同じようなボルトの使い方がしてます。間違っただけの使い方はそのまま間違ってますから、恐らく見たんだろうと思う。でも、その当時の宮大工さんたちがボルトナットを駆使したというのは、非常に評価すべき点だと思います。五重塔っていうのはインドに始まりまして、ずっと中国、韓国を通過してきてくるんですけど。中国では大雁塔はじめ少し登れるっていうことが塔として存在してたんですけど、日本の塔っていうのは一番下に仏舎利を入れますから、それを踏むなんていうことはあり得なかったんですけど、江戸時代後期から登ろうという意識は生まれてきたようです。これは東寺を見学させていただいたときなんですけど、非常に大きな建物です。僕が手を伸ばしても、縁のところから木組のところには届きませんので、このぐらいの高さを持つてる。ただ、これ本山寺の図面なんですけど、東寺は床を貼ってませんから、東寺というのは護国寺の五重塔です。ところが普通寺も、本山寺も床を張ってますから、この赤の梁が通せないんです、床から突き出てしまいますから。それを床の下に圧縮、収めてしまっただけの体力的なものをもたなきゃならないという、非常に苦勞をします。この辺が新しい技術ができたから、***をできるだけ垂直に建てて、床を張って構造体を押し込んで、それでもたす。100年もったわけですから、すばらしい技術だろうと思います。これは普通寺の建物、堂々たる姿をしてると思います。本当に江戸に始まって建てていくんですけど、こんなこと言ったら怒られるのかなと思うんですけど、807年に、普通寺の五重塔がもし本当に建ったと考えて、それから以後、何度か建て替えています。倒れたり燃えたりしてるんです。今の五重塔自身が天皇からいいよと言っていた多分最後だろうと思うんです。江戸時代からのちに建ったって、これしかありませんから、その最後だろうと思うんですけど。807年にもし五重塔が普通寺に初代の五重塔があったとして考えても、1212年の間に五重塔が君臨してくれたと、500年足らずです。ほとんどないんです。半分以上、五重塔がないとこを過ぎてるっていう。そのぐらい五重塔を建てて倒れないで残してるっていうのは苦肉の策、非常に苦悩だったんだろうと思う。技術的にも維持管理も大変だったと思う。雨は漏るし、雨が漏れだすと木腐ってしまいますんで、そういうことを乗り越えてきたんだろうと思う、この普通寺の五重塔。これを少し写真を撮ってますんで、見ていただけたらと思います。きちんと直されてるっていう証拠は屋根の軒の線が狂ってないっていうのが明快にわかっていただけたと思いますけど。面白いのはこれ、初重なんですけど、軒回りの彫刻は初重がしっかりしてます。見てもらおうと。二重になると、くもがった(?)ぐらいぴっと入れて終わってるんです。こんなこと言うたら怒られるかな。三重になったら、全くしてないんですね。精根尽き果てたのか、お金が尽き果てたのか。一時止まっていたこともある。それは戦争があったり、いろんなことするわけですから、大変だと思う。でも四重、五重になると、もう一回頑張るんです。これは雲なのか波なのかわからないっていう話をして、僕にしてみたら、空海さん、ここまで船で来たっていうこともあるから波にしようよということで、そう言いながら、そんなに大きな話題にはなりませんでしたが、僕は波でいいんでないかなと思って。雲よりも波のほうが価値あるんじゃないかなと思いますけど。五重にはきちんと彫刻が入ってま

す。ネットをかけて、鳥が入らなくしてますんで、非常に維持管理的にも傷みも少なくなってると思います。少し中まで写真をお見せしたいと思います。傘竿***ありまして、そこをくぐっていきます。中にも、扉にも、カルド(?)なんですけど、彫刻をしてまして、梵字をつけております。これは南から入った。ごめんなさい。西から入った正面のところです。ここにシブツ(四仏?)が通ってまして、真ん中にある柱は心柱ですから、上の相輪からすべてつながってるわけです。この五重塔が日光の東照宮とここの五重塔と本山寺が、懸垂工法という工法になってます。心柱を上でつって、下を浮かしてるっていう状態で、それである意味で言うたら重しにも使ってるんですけど、耐震上うんぬんという話がいつも話題になりますけど、そういうところでも使ってるんだろうと思います。下を心柱が浮いてる部分が***。善通寺はある意味で言うたら、懸垂工法の一番の先端だろうと思います。いい例だと思いますけど、つってる位置が心柱の総長さの3分の1ぐらいのところでつってますから、揺れを非常に少なくコントロールできるんだろうと思う。日光東照宮は半分、2分の1ぐらいのところでつってますんで、逆に言えば、こういうところでつってますから揺れるのが非常に大きいっていう世界が存在する。それを改修したのが、善通寺だろうと思います。これは東寺の心柱です。これは、心礎の上にどんと据えつけて、荷重もすべて受けてっていう状態。懸垂工法、この右側の写真がずっと心柱を二層から見上げたところなんですけど、最終の五重のところになって、もう少し階段、階段じゃありませんね。上に登らせていただくと、金物と鎖でつってます。これも当時、明治30年代の建物としては非常に立派な構造的なものがわかんないと、こういうつり方はできないと思うんです。そのつり方も非常に進歩的っていうか、技術的には最先端をいってるだろうと思います。それで心柱が、俗には耐震上に役立ってますよっていうのなかなか立証するのは難しく、こういう五重塔に機材をつけさせていただいて調査をすることも自身もなかなか許されるものじゃないんですけど、善通寺はそれを許可していただきましたんで、調査をさせていただきました。建物を計算した周期で押すと、建物が揺れだすんですけど、その揺れの周期を全部実測するという方法やります。周りに車が通るとそれだけでだめなんで、夜中にやろうよっていうんですけど、実は運がいいのか悪いのか、大雪になりまして、寒かったんですけど、車通らなくて、しんしんと測量ができました。少なくとも、これも構造の建築基準法を作るような先生方が最終的に出してくれた結論は、善通寺の五重塔の心柱は、基本的に地震のときに悪さをすることは考えられない。でも、耐震上にそれが絶対的に有効に働いてるかどうかっていうのは、難しいっていうことを話をさせていただきました。でも、そういうことをもう少しきちんと調べる時期にきてるんだろうと思うんですけど、なかなか調査っていうのは少なくとも3本しかありませんから、本山寺も今、調査をさせていただきますんで、完成したら、もう一度調査をしようと思ってます。それともう一つ心柱が耐震上有効でなかったっていうこと、有効であったということを実証するのは難しいという一つの例なんですけど、実は五重塔は地震で壊れたという例が1個もないんです。風で倒れるか、焼けてるっていう状況です。室戸台風のときにも倒れた実績、事実があります。先生たちと話をしている中で、多田さん、もし心柱が地震で耐震上有効であるということを実証するのを当時の大工さんたちがわかってたら、何十年に1回、100年に1回来る地震に耐え得るよりか、毎年来る台風で耐える建物を考え

てたはずや。ゆえに心柱っていうのは、相輪を支えるために、あの建物が口を開かないように、雨漏りを防ぐためっていうか、そういうことのためには作られたと思いますけど、残念ながら耐震上、有効だろうということを知って作ったとは思えないっていうふうなことに結論は達しました。でも、何らかのいい形はしてたよねっていうことは察知されてたような気がします。それをスカイツリーのタワーの中で、五重塔を生かしてますみたいな話があったんで、これはちょっと許せないなと思いつつ、でも、世の中こういうことなんだろうなと思ってます。基本的には心柱が建物が揺れたときに、建物が向こう揺れたときに、心柱逆に揺れてくれれば一番止めやすいんで、制震に入るんで、それは技術的にこういうことすれば、簡単な方法なんで。でも、五重塔がそうやったっていうことを言うと、一般の人たちはわかりやすいんかもしれませんが、僕は一般の人をだましてるような気がして、非常にもう少しきちんと話をすべきでないかなと思ってます。これは友人が写真家が撮っていただいた写真なんですけど、登るということに対するあこがれというものが塔には存在してくる。これは宗教的なものからもう少しそれを発展したときに、そういうものが欲しくなってくるんだらうというふうに思います。善通寺の五重塔は大きくて、はしごがかかってます。階段と言っても構わないようなはしごが五重までかかってます。これは2階の心柱を落ち込まないように蓋をして2階までは毎年2回ですか、公開で上げられるようになってると思う。ぜひ体感をしていただけたらと思います。3階から上も大きい五重塔ですから登りやすいし、頭もなかなか打つところもないんです。でも、心柱を何カ所かできつぎながら建てこんでおります。この辺は四重になるんですけど、ものが大きいことと、貫（ぬき）っていう柱と柱の間に木を差し込んで、くさびで留めてっていうことで、緩んできて、締め直せるっていうのは一つの利点だらうと思います。鉄骨の建物でも、ボルトナットが緩めば締めりゃいいわけですから、基本的には同じだらうと思いますけど、こういうふうに構造が露出していると計算もしやすいだらうというふうに思います。これは五重から心柱を見たところです。堂々たるもんだらうと思います。本来の役割っていうのは相輪を建てるっていうことが大事だらうと思うし、登るということに対する少なくとも、シン（心？）にくる大日如来をどうするのかっていうのは大きい問題だらうと思うんですけど、善通寺は五重のところに、東向きに大日如来を安置されてまして、これもすごい僕、新しい、いいシステムというか、解決方法だらうと思う。大日が上に置いてありますからっていうと、何となく上がっても、とがめる心が少なくなるのかなと。それと心柱が相輪を支えてるっていうのは、この大きな相輪を倒れない、風を受けますから、相当これ揺れます。それを倒れないようにしてるのと、相輪の上から宗教的に言えば、皆さんにいろんな徳を与えるために降り注ぐんだらうと思います。そのデザインっていうのは、善通寺は非常にすばらしい人に頼んだらうと思います。なかなか相輪のデザインを著名な彫刻家に頼むっていう例は少ないと思うんですけど、善通寺は堂々たるものを作られてると思います。もう一つ五重塔とかを生かすために、いろんな事業をします。僕はこれは有形な建物と無形な宗教的なものをうまく競合させて、生かそうとする大きな手法だらうと思います。僕も福男にさせていただいて、投げさせていただいたんですけど、こういうふうな体感を多くの人たちがもっとやっていただいて、この本来伝えなきゃならないもの、これ宗教だけでなく、文化的なものを含めてだろ

うと思いますけど、それを伝えるっていうのは、大きなお寺の仕事でもありますし、僕らが受け取らなきゃならない部分だろうと思う。空海まつりは特に善通寺市内歩いて、見せるっていうことも大きな、空海さんが帰ってきたこと表明するんだらうと思いますけど。伽藍の使い方もうまいですね。金堂と五重塔と佐伯祖廟のところとの空間を使うのも、非常にうまくやってるなというふうに思います。空海まつりのときには善通寺の、僕らも獅子組***持ってますけど、そういうものを全部集めて、ものすごい音の中で獅子舞をやるんですけど、この音というのも、仏教にとって大事なことだろうと思うんで、それも、うまくコラボレーションしてるように思います。これも建て替えたはずなんですけど、江戸後期の金堂です。少し外の基壇が、これ二重基壇になってまして、今は3間3間の小さい金堂なんですけど、元は多分4間5間ぐらいか5間5間ぐらいの大きさがあつたと思うんですけど、その2段基壇のところ、恐らくこの金堂の北側にあつたと思われる講堂の石なのか、礎石なのか、それを再利用してます。何カ所かあります。5、6カ所あると思いますけど、こういうもの、復元しながらでも、それでも二重基壇にしてるんで、恐らく***基壇ができて7間のぐらいの建物が建つて、それがまたなくなって3間3間の裳階(もこし)つきに変わっていったんだらうと思いますけど。それを建設し続けられるっていうのも大きな力だろうと思います。これが重文になった大きな理由は、建具とかそういう古式にのっとり、きちんと作られてること。それと裳階が非常に立派な形をしています。それと維持管理がいいっていうのは、柱、腐ったとこ直してるとか、そういうところが評価されて、重要文化財は指定されることはできました。維持管理がしっかりしてるんで、軒先の瓦塔が傷んでないこと。それからネットをかけて、あととか(?)そういうものが入らないようにしてるっていう、そういうふうなもの。善通寺の建物は年に2回ほど瓦屋さんが屋根を掃き掃除をしています。それで掃き掃除をしてるということは、全部職人さんが見るわけですので、傷んでるとその箇所を確認して、ちょっとしたものだとして、すぐ直してしまつて、大きく傷んでるものは何年かに予算をつけて直すっていうシステムを作ってます。もう一つ、この建物は禅宗様っていうのをぼこっと取り入れてるという。いくつかの様式が混雑してるんですけど、禅宗様の在り方、ここの柱が立ってる、礎石あつて、敷瓦とツライシ(?)になってるんですけど、それも非常に珍しい方法だろうと思います。ところがその部分はどうしても柱の根元が結露して傷んでくる。これを委員会のほうで調査をして、できるもんならその傷みを止めたいっていうことを言われるんですけど、今、出るとおり、日本中の国宝問わず、すべての建物の礎石と柱との間は結露しております。それを全部見せて、日本中全部やってますから、そんな容易なもんじゃありませんけど、少なくとも金堂の中で、一つここだけは何とか原因を追求していろんな傷み方があるんだらうと思いますけど、少し探ってみますということで、半年ぐらひかけて風向きとか湿度とか風の流れとかっていうのを、これも機材を金堂の中につけさせていただいて、調査をしました。その中で風が、昔の建物ですから機密性がよくないんで、逆にそれが周りの空気をうまく流してるんですけど、この辺にあるいろんなものを置ける部分もありまして、この色が薄くなつてる部分はずっと空気が流れてる部分なんですけど、これをうまく流すと結露っていうのは起きないんじゃないか。空気の温度差ですから、それを均一にすればいけるんだらうということで、一つの結論を出しました。今、羅漢さ

んたちを少し移動させていただいて、今、壁際のところにものをのけております。恐らくこれで傷みちゅうのは起きてないと思うんですけど、これがすべての日本中のお堂の中にOK、これ、一つで全部直るとは思いませんけど、初めは地下から吸い上げてきたんではないかって言ってましたけど、そんな、あんな高いとこまで水吸い上げるわけありませんので、そういうことを、これも大学の先生たちの、環境の人たち、設備の人たちに来ていただいて調査をいたしました。これ、薬師如来で、この薬師如来、僕は建築なんであんまり仏像のことわからないんで、またこのことについて話してくれるパーツを用意してるんだと思いますが、非常に立派な堂々とした薬師如来なんです。ただ、この大きい座られてる薬師如来は、うまく展示してるというか、そこに安置されておっていただくために、当然裳階がついてるんですけど、その裳階、二重、二つに梁が通ってるんですけど、2本が通ってる。上の梁が、***ぐにゃっと曲がってる。そういうふうなことまで気を使いながら作ってるっていう、これも大きな評価だろうと思う。その辺がうまくあれだけの大きさの仏像、薬師如来を安置されて、お参り行ったときに開放感があるというのか、あの像が神々しく見えるっていうのを支えてる一つの要因だろうと思います。その中身は大変なものでして、五重塔と同じように、屋根を下げないためにいるんなところに、ハネリ(?)っていうのがあるんです。構造体を入れるものっていうの。そいつをここ、棟札は出てきたんです。ちゃんと棟札箱っていうのを設置してまして、金具で留めてまして、それを背中に入ってる。ものは、資料館のほうに入ってますけど、そういうふうにして安置してる。これは西側の妻側のとこなんですけど、いくつか修理してることっていうのがありますけど、当初の建てた人たちを全部大工さん書いてる。こういう書き物っていうのも非常に大事なもので、これがあるから何年に建てたっていうことも事実として***いけます。その国宝っていうのは重要文化財の二つの建物を目の前にして、柴燈護摩(さいとうごま)っていうのをやる。2、3日前もやってたと思うんですけど、これ、サカタさんがやってる姿ですけど。これも僕は無形のもんですけど非常に大事なものだろうと思いますし、相当な人が来られてます。これもただ単にイベントじゃなくて、意味のある、宗教的にも意味のある、生きていくうえでも意味があるっていうことを盛んに人たちに伝える手法だと思います。これ、歩くの熱いと思いますけど、歩いてるサカタさんがやけどしないから大丈夫だと思うんですけど、僕らは無理だろうと思う。本当に少し消えてしまってから歩かせていただいている。こういうこと体験するのも次の世代の人たちにしっかりと伝える。これもお寺にとったら、僕は非常に重要なことをやられてると思います。こんな、有形のものと無形のものと、もちろん宗教っていうものを題材、テーマにしてですけど、これをやられてる総本山善通寺の二つの伽藍っていうものの有効、利用価値っていうのは大きいと思う。一つ、これある意味で残念なんですけど、空海まつりちゅうのはずっと街を歩きます。そのときに、***中門過ぎに、こういうシンボルタワーが立ってます。設計者、私なんですけど、若いときに作りましたけど。これはそこを通過するときに、市内をせっかく歩いてくれるんだったら、そこに付随してる商店街もそういう雰囲気醸し出そうよって当時の赤門筋の人たちが、いろんなことを考えて作ろうということを決めました。その最大の理由は、西安の空海さんが勉強しに行ったところの青龍寺に空海記念碑を建てようというのが四国中で起こりまして、当然善通寺が中心になってやら

れたんだと思いますけど、それが向こうに建ちましたからっていうんで、大雁塔は652年頃できてるんですけど、それから延々と、どんどん美しくなってますけど、間違わないで直して、価値を失わずに直してますけど、そういう時間に勝ってるっていう。この菜の花畑のところに空海記念碑が建ってます。こういうものを設計させて、僕は手伝いだけで設計者じゃないですけど、手伝いをさせていただいて現地に行って、場所も決めさせていただき。せっかくそういうものを作ったんやから、その思いを善通寺に入れようっていうことで。ところがこれ、たかが30歳そこそこで、これ傷んでないでしょう。これ建築中じゃないんです。これ、解体中なんです。傷んだから壊せっていう。

男性 A 瓦が危ないんで。

多田 瓦は危なければ維持管理してもらわないと。瓦がだめだったら、僕は金属板に替えてでも、残すべきですよっていうの話をしたんですけど、全く。残念かどうかわかりませんが、少なくともなくなりました。これもなくなっていくことは決して批判だけするわけではありません。善通寺の中でもいろんな建物が当然消え去っていくのは、これは仕方ないと思う。ただ、この街の中で、この街を作ってきた、支えてきたっていう重要な建物がいくつかは存在するだろうと。これは世界館という劇場なんですけど、これも6年ぐらい復活運動というか、保存運動をやったんですけど、結果的には解体をしました。持ち主も非常に理解があって協力をしてくれたんですけど、これは江戸時代に建ってる金丸座と、大正時代に建ったんですけど、明治建築ですね。明治建築の劇場のこの二つが残ってたら、どんなイベントができてきたんだろうと思って。もっと面白いのは、赤門のすぐ横です。お寺にくっついて作ってたっていう。これも旧陸軍が、軍隊が入ってこない、こんなモダンな劇場なんて要らないわけですから、そういう意味では善通寺の中では大事な建物だったと思います。もし残すとしたら、こういうものをピックアップして残していくべきだろうというふうに思ってます。あとは善通寺の中でこれも何度も言う南大門ですけど、こういう立派なものをくぐると、これも釈迦堂ですけど、この建物も立派だろうと思う。あまり改造もされてません。もともと御影堂として使ってたんでないかなと言われてますが、中にも、その痕跡も残ってますし、形態的にも間違いないだろうというふうに感じてます。面白いのは、これは善通寺がすごいと思うのは、こういうゲイヨ（？）って、砂場（？）のところに、ここにできてるようなやつ。古いものは捨てるで、ちゃんと残してるんです。その残し方もすばらしいですね。小屋の中、入れてますから、まず誰も取っていかないし、捨てられないし、こんな汚いもの、どうやって捨てることもないだろう。これ、鐘楼なんですけど、はかま履いてるんです。スカート履いてるんです。これって非常に上品な建物ですから、格が高くないと、こういうの作られないんです。初めに登録にすると、文化庁の方が何人か来られたときに、こんなはかまつてあとからつけたん違うかっていう話やったんですけど、実は当初からありました。それともう一つは、その中に、なぜ当初からあったかっていうのは、中に、流用されてる梁があるんです。こんなもの、はかまがなかったら丸見えですから、そんなことするわけがないだろうっていう。彫り物も、江戸になってきますと、金物がしっかりしますんで、彫りやすくなってくると思う。それとか龍王社っていう、これ雨ごいのために絶対的に必要な建物なんですけど、これも

江戸末期の非常に偉大な、これ金堂の両サイドにありますから、もしあれだったら見ていってください。これがもう一つの弁天社っていうのも存在してます。両方、お参りすると、きっといいんだろうと。あともう一つ、これは建物自身は変わってるんですけど、経蔵、お経入れた蔵がある。中、回せるんですけど、これも見せてもらったんですけど、こういうのもうまく利用されてお経とかうんぬんとかを書いているものを広めるためにも利用されてるのかなと思う。中門は直して修理もしてるっていう状況で、修理って非常に難しく、きれいになったからよろしいっていうわけじゃなくて、その技術とか材料とか工法とかっていうものも、きちんと継ぎながらの、伊勢神宮と同じですね。新しい工法ができてでも、それを使うんじゃないで、きちんと工法、材料を伝えようというのが大きな役割。で、これも、はかま履いててすばらしい門なんですけど、そこを当然いろんなお祭りのときなんかくぐっていくわけで、写真のスポットになってますから、多くの人たちが写真を撮りますよね。写真を撮りたいと思える空間をいくつか用意してるかっていうのも非常に重要なことだろうと思います。そして二十日橋を渡っていくんですけど、この渡るときに、橋もものすごく石の橋としては伝統的なものを守ってるんです。もう一つ弁天社っていうのが、橋の北側にあります。これも重要な建物でして、当然江戸からはできてるんですけど、江戸末期には造られてる。これも再建、もっと古いと思いますけど、こういう小さなほこらがあります。これも学芸員の方が非常にしっかりされてるんで、残さなきゃならないものを、さびわけて、きちんと残されております。これ厨子と台座も残っております。残ってるんじゃないで、残してますというのが正解だと思う。二十日橋渡って、この仁王門に入っていくんですけど、そのロケーションも僕はうまいなと思うんですけど、通過するときには何を伝えられるかっていうのが、それぞれの門が持つてる役割だろうと思うんですけど、ここに当然仁王さんがいたわけで、これをこの場所から一度はずして県立ミュージアムへ持って行って、多くの人に見てもらおう。非常に勇気の要ったことだろうと思うんですけど、これを機会に逆に言えば、この仁王さんたちを調査ができるっていうことを考えると、その価値は数倍になっていったと思うんです。僕も近くで見せてもらいましたが、いろんなものが出てくる。運ぶときには僕は手袋履いてやるんかと思ったら、素手でやるんです。どうしてなんですかって言ったら、手袋履くと傷めるって。自分の手だと傷めない。もちろんそれはきちんとやってもらう。そんな話を3月の10日には県の三好さんが仏像のこと薬師如来と両方のこと話してくれると思います。この人の話面白いですから、ぜひ聞きに来てください。私もまた来るつもりでおります。それと仁王門入っていきますと、これも珍しい番所があります。番屋っていう、番所っていうの、ここから入ってくる人、のぞいてたんです。ここに大きな木があって困ったなと思ってた。この番所も、これも登録文化財になってる。今、お見せしてるもんは、すべて登録文化財になってます。この仁王門から次に通っていく中で、この仁王門が、これも一般の人たちが通過していく、ここに回廊というのがあるんです。これも今、再建だと思います。古くからこの形態があったんだと思う。非常に堂々たるというか、長さが長いですから、これはすぐそこですから、そういう目で見ていただいたら面白いなと思う。ここを通られるときっていうのは、結構僕は住職さんたちも緊張すると思うんですけど、僕はすぐ横で住んでますけど、ここ通るときには御影堂に行くっていうことを思わせてくれると思いま

す。この長さありますから、北側に行って見ていただいたら、このそうそうたるものっていうのは。それと彫刻類もしっかりしてます。この形態も、これが元のやつが残っていると、ものすごい大変な財産だろうと思います。でも、それを確実に残されてるっていうのはすごい維持管理がしっかりしてると思います。***にとっては非常に大事な御影堂なんですけど、この御影堂も何度か大きくしてるように思われます。***にも、上がらせてもらったんですけど、増築を重ねてる。でも、壊さないで、どうも増築してるみたいなんで、もう少し具体的調査をしてこの建物の履歴がしっかりすれば、これは重要文化財の価値はあるんだろうと思うんですけど、重要文化財だったら、京都なんかで皆さんも見られたと思います。相当な建物が重要文化財ですから、それに匹敵するためにいろんな書類ちゅうのは必要になってくると。中門です。内々陣があって、内陣があって、外陣がってっていうふうが続いていくわけですけど、もともと内々陣のところは建物だったんでないかなと思うんですけど、これをどンドンいろんなことやらなきゃならないことを含めて、広がっていったような気がします。でも、明かりの問題も、今から考えていこうということで、いくつかの案を出してるんですけど、昼間も夜も、明るいときも、暗いときも雨のときも、それで行われる法要が神々しく見えるような照明を考えるべきだろうというふうに思ってる。それと内々陣のところに敷居があるんですけど、こんなとこ建て入れる(?) ことって必要ないよねって思うところにありますんで、恐らくこれが広がったってことの一つの証になるんだろうと思います。これは、あまり見せちゃいかんそうなんですけど、帰りに、どうぞ。戒壇めぐり***。これは中、真っ暗です。僕ら、小さいときから、***遊ばせてもらったんですけど、これほどの暗闇ちゅうの体験できる。なんぼ目玉玉広げても何も見えませんから、悪いことしてると怖い。僕は悪いことしてなかったんで、***ません。ぴゅっと走ってましたけど、今でも時々見せていただきます。ぜひ、行かれたことない人は見て帰ってください。それと御影堂に当然奥殿がありまして、一番大事なことなんです。これも昭和になって建て替えられたものなんですけど、ここぐらいになりますと、非常に軽やかに造られてます。構造体自身もそうです。手すりも細いです。非常に、ハネ(?) の甲羅(?) を使ったり、金物もきゃしゃになってるっていう、そういうふうな表現もしてると思います。それで御影堂と奥殿の間にツリワ(?) っていう中間体があるんですけど、ここから中を、本来は誰も見れないんですけど、内々陣のほうを見ますと、うまく空海さんをお祀りしてる奥殿の、何年に1回開けられるそうなんですけど、少なくともこの漆の扉は少しいい形で、じっと見てると10分ぐらい眺めると見えるっていうぐらいの照明をやると面白いのかな、価値があるのかなというふうに、今、考えてます。それと慰霊を祀るために聖霊殿っていうの造られてるんです。この周辺に付属棟(?) も作られてるっていうのは非常に価値が高いだろうと思います。この聖霊殿も、もともとは多くの建物が、善通寺の中の、特に誕生院のほうは桧皮葺だったろうと思うんですけど、その檜皮が、今、これ維持管理がとてつもなく金額が多くかかりますから難しいんですけど、今、1カ所だけ死守しております。聖霊殿の裳階の部分です。何とか維持管理、ここだけでも、元の姿を残そうということで話は進めてます。これは周辺の建物、これも全部昭和の建物ですけど、登録文化財になってます。明治40年ですから、こういうのは高貴な方が来られるときに、どうしても必要だった大玄関とか小玄関っていうふう

なもの、これも格式高く作られております。また堀があるっていうのが非常に価値が高いんだろうと思うんですけど、堀があるから橋を渡る。橋を渡るときに、空海さんが向こう行ったときも橋を渡るときに靈験あらたかになったとかいう話があると思います。そういうふうなものを体感して、この勅使門はいつも開けることがないと思いますんで、こういう天皇が来ても大丈夫なものを持ってっていうのも、今から大きいと思いますし、堀も極楽堀も基本的には登録文化財です。もう一つは、これ仁王門の前に実は石垣があって、石の手すりぐらぐらしてたんですけど、フェンスを張って安全を守ろうとしてたんですけど、決して美しい空間じゃないんで、これを安全性と善通寺らしさというの、両方を兼ね備えたものを作ろうということで、フェンスをのけて笹を植えました。これを踏んで向こうへ行く人は自殺行為ですから、そら、しょうがない。そんなこと怒られる。でも、このフェンスをのけてしまって、こういうものに直そうっていうことを提案して、即実行してるって、こういうのもものすごく評価すべき項目だろうと思います。それとお寺の方も多くの方々も悩んでる植栽なんですけど、善通寺は勇気あります。建物を傷めるからって松の木を切りました。僕はこれは正しい選択だろうと思います。もともとの周辺の木はそんなに生えてると思いません。さっき話してた番所も、こういう屋根を一部削ってますけど、これも修理されると思いますけど、今からもっとその価値が多くの人にわかってもらえると思う。できるもんなら、そこへ入ってもらおうと面白いかもしれないです。木によって塀が傷んでるっていうものも避けられると思いますので、こういうものは僕は勇気ある決断だろうと思います。丸亀の人に怒られる。勇気のなかった丸亀城って。

男性？ (笑)

多田 都市公園として確かに木があって美しいんですけど、その木をのけなかったら、確実に崩壊しますよっていうのは、僕ら 20 年前から提言をしてたんです、丸亀のまちづくりをしてるとき。お城らしくないって言うて断られてたんですけど、木 1 本生えてると、昔の武士は登りますから、お城としての、この石垣は誰も登れなかったって丸亀城言ってるはずなんですけど、木 1 本で登ってしまいます。そうすると本来持ってるそのものが、形が、工法が、形態が持ってたものを間違えて誤解してしまうと、こういうことが起こるんだろうと思います。これ、石垣のところを下から写真撮ったんです。上の木が根が張って石が押されてるの、誰が見てもわかるんで、これで壊れないで、今から 20 年 30 年おりますかって、おるわけないでしょうって、これは多くの専門家もわかってたはずなのに、それを議論に出さないっていうのは僕は大きな間違いでないかなと思う。県から、オゴさんが来てくれてますので、オゴさんに伝えとかなあかん。日本って本当に長寿命の建物、造るのも下手だし、残すのも下手ですって。これ、みんな、知ってるニューヨークなんですけど、ここにある多くの建物、これ全部現役なんです。これ最近の写真なんです。ニューヨークの方から送ってもらった。一番若いんで、グッゲンハイムいうて、フランク・ロイド・ライトっていう建築家が造ったんで、もう 80 歳超えとるんです。クライスラーとかエンパイアステートビルなんて 80 歳超えてる。90 歳近くになってる。***が真ん中にあるアイアンビルっていうの、僕が行ったときも非常にいい形だった。116 歳、現役です、すべて。この前、相当力を借りて、何とか残せた香川県庁舎、たかが 60 歳。こんなものを使えなくなったって言うのかなと思う。そ

れとこの建物は僕は丹下さんという建築家が造ったことが価値があるんじゃないくて、当時 60 年前に日本の伝統的な寸法みたいなものをコンクリートに置き換えて作ったっていう世界に誇れるものだっていうことをきちんと話をすべきだろうと思います。これが善通寺なんで、もっと怒られるかもしれません。偕行社は何とか僕は 40 年かかって保存改修をしようと思ってできたんです。その横にある庁舎が 50 歳なんですけど、どうも消えるらしいんです。恐らく香川県の中で庁舎って、香川県庁舎と善通寺市庁舎っていうのは非常に価値が高いと思うんです。この建物は特に、柱列、列柱があるっていうことは善通寺にしか僕は発想しなかったこと。佐藤武夫さんという早稲田の卒業された建築家が造って、ご本人とも話をしたんですけど、善通寺らしい。そのときにはヒラオ(?)さんという市長と佐藤さんとが同級生やということがあったんです。善通寺が建てられた建物って小さなかったんです、当時。それでは市民が誇れるような庁舎にはならない。それは誇るっていうのは、お金使うという意味じゃなかったと思う。それを解決するために、そうすると瀬戸の夕風のときに窓を開けられるように、そんなことを考えて、ひさしをつけて、善通寺らしい柱の列柱をして置いたっていうのは非常に価値が高いだろうと。それを僕は壊すのは構わんと思いますけど、議論して皆さんが知って、それでも壊そうねっていうなら話は別だろうと。でも総本山善通寺は 116 歳、300 歳、こんなものを本当に維持管理してるっていうことに対する価値つうのはでかいと思いますんで、でも維持管理はものすごく大変です。僕らも協力しますが、先生方も来てもらって協力しますが、なかなかそう簡単に解決できるものじゃないと思います。できるだけお金もかかることだろうと思いますので、皆さん、助けてあげてください。そんなことで話は終わります。どうも、ありがとうございました。

(ご指定箇所終了 01:35:09)